

保育現場における児童文化財について そのⅡ

— 市販教材に見られるうた（手）あそびの問題点と学生の選択眼 —

北 村 恵 子
Kitamura Keiko

要 旨

保育現場で行われているうた（手）あそびは、各種のうたやリズムに乗って言葉と身体の一部の動きが連動し、子どもたちを楽しめるあそびの世界に誘う児童文化財として機能している。

今論文は、うた（手）あそびを学ぶ際に使用する市販の保育教材の問題点と学生の選択眼養成について、童謡「どんぐりころころ」を素材にし、学生の音楽的能力（読譜力・歌唱力・創造力・記譜力・コミュニケーション力）などを育成しようとする試みを述べたものである。

キーワード：・うた（手）あそび・市販保育教材・学生の選択眼養成

I. はじめに

子どもたちを取り巻く生活環境や社会環境の中で、児童文化財はその心身の成長発達に大きな影響力を持っている。児童文化財の種類には、玩具・絵本・童話・紙芝居・人形劇・指人形・影絵・ペープサート・劇あそび・うた・踊り・合奏・テレビ・漫画その他などがあり、多様でその間口は広範である。

今論文は、上田女子短期大学児童文化研究所「所報」第28号で述べた「保育現場における児童文化財について そのⅠ —音楽的環境作りの視点からの手あそび—」(2006)に引き続き、多くの児童文化財の中から、保育者として必要なうた（手）あそびを学生が学ぶ際に使用する保育教材について、特に巷に溢れる市販保育教材本の問題点と学生の選択眼について論じるものである。

カラフルな絵、図、写真つきで市販されている教材本には良心的なものも多いが、時々常識的に問題のあるものや、曲の音程や記譜等に間違いのある本も見られる。ここでは、そういった教材例を紹介し、学生たちの教材選定における選択眼を養成するための試み、及び学生のうた（手）あそびに対する意識を中心として論述した。

Ⅱ. 保育現場におけるうた（手）あそびについて

1. うた（手）あそびの定義

一般的に、あそびうたはあそびを伴う歌、うたいながらあそぶものであり、手あそびはうたやリズムに乗って手指や身体の一部を動かしながらあそぶものと考えられている。しかし、両者は渾然として分け難い部分もあり、解釈によって違いもある。保育現場において手あそびは児童文化財の一つとして大いに利用されているにも関わらず、その定義は曖昧で、人それぞれの考え方で相違があるという現状である。また、手あそびの本として売られている様々な市販本でも、それぞれ多様な名称で扱われている。例えば本の表紙には、手あそび、指あそび、足あそび、顔あそび、身体（表現）あそび、ペア集団あそび、伝承あそび、歌あそび、ふれあいあそび、その他など書かれている（註1）。しかし、それらは何れも各種のうたやリズムに乗ってことばと身体各部の動きが連動し、子どもたちを楽しめるあそびの世界に誘うものとして取り扱われており、表紙の名称は違っても、内容はいわゆる保育現場で行われている手あそびの範疇に属するものと考えられる。

これらの状況を勘案し、本論文では単にそれらの名称を「手あそび」と括るのではなく、上記の内容も含めて「うた（手）あそび」と称することにしたい。

2. 学生の考えるうた（手）あそび

過去に実施した手あそびについての学生への調査によれば（註2）、保育現場において手あそびは何故必要かの答えの第一位には「子どもたちの集中力を高め次の活動への区切りとするため」があげられ、次いで「子どもたちの総合的な成長発達を促す」「音楽・リズム・ことば・動きによる楽しさと心の開放」「保育者と子どもまたは子ども同士のコミュニケーションによる気持ちの共有の場」等の順であげられていた。

この様に、うた（手）あそびは道具もいらず、その場で簡単に実践することが可能であり、また、その場を構成する子どもたちと先生との人間関係や信頼関係構築の入り口として機能しており、保育現場においても、たかがうた（手）あそびだからと軽視できない重要な位置を占めているといっても過言ではない。はじめての実習を経験する前の学生たちは、うた（手）あそびの必要性の認識が少なからず欠けている様子が見られ、授業での技術習得にも甘さを感じられた。しかし、実習を通して子どもたちとの交流の場でその威力を実感し、うた（手）あそびの重要性を再認識したものと考えられ、以後うた（手）あそびの習得数を増やしたいという熱心な姿に変化した。

Ⅲ. 保育教材について

1. 授業で行ううた（手）あそびの保育教材

うた（手）あそびは、幼児教育学科の保育や幼児に関する授業の中で様々な形で学生に紹介され、また、学生自身が友人との交流や本などからその習得数を増加させる努力を自発的に行うなど、将来幼児教育者になった時に困らない様な保育技術の一つとして、その習得に対して

学生自らが重要性を認識しているものといえよう。

筆者の担当する保育内容「音楽表現指導法」の授業においても、数多くのうた（手）あそびの紹介をしている。15回の授業のねらいは1. 幼児の音楽活動の特性を理解できたか 2. 幼児の活動を援助するための基礎技能や教材研究が深められたか、である。具体的には、音楽表現とは何か・音楽表現あそび・子どものうたと伴奏法・簡易楽器の扱い方・合奏・劇ごっこについて・創作オペレッタの作り方・音楽療法とは何か・音楽表現を伴う総合活動について等であるが、毎回の授業の最初に必ず子どものうたとうた（手）あそびを数種類紹介してからメインの授業内容に入っている。今論文ではその詳細は省くが、合計するとかなりの数のうたとうた（手）あそびを紹介していることになる。またその際、特に音楽的な要素を重視し、楽譜を配布して読譜・記譜・歌い方について指導し、加えてあそび方・動き方・幼児への言葉がけの方法及び話し方等の指導をしている。そこで紹介するうたやうた（手）あそびの選択に当たっては、様々な年齢の子どもたちに対応できる教材の種類を用意することを心掛けている。

また、その際には市販の保育教材も利用するが、中には教材本としてそぐわない内容のものが存在しているのも事実である。

2. 市販の保育教材の問題点

ここでS出版社、K氏監修の保育教材本の例をあげ、その問題点について分析してみたい。

本の題名は「保育園・幼稚園のうたあそび」で、表紙には、“スタンダードなものから、今人気の曲まで、子どもといっしょに楽しくあそべる！”とか“すぐに使える53曲・あそびかたアドバイスつき”と、カラフルな色で漫画チックな絵と共に書かれている。また、この本の特長として、保育者が園児に向けてすぐに活用できるうたあそびを集めていること、“園生活のはじめや終わりに歌ううたあそび”や“行事や生活に役立てるうたあそび”など目的によって選べること、保育者がうたあそびをはじめやすいようにきっかけにする「はじめのことば」をつけていること、子どもたちに話しかけるときに参考にして欲しいこと、うたあそびに対象年齢の目安を記していること、同じうたを使ったあそびかたのアレンジを載せていること等をあげている。

これらを見る限りにおいては、現場の幼児教育者の即戦力として有効なうたあそびの技術が細かく紹介されているものと理解できるだろう。内容的にも1. はじまりと終わりのうたあそび 2. 指や手の動きを楽しむうたあそび 3. からだの動きを楽しむうたあそび 4. 行事や生活に役立つうたあそび 5. みんなであそぶうたあそび 6. わらべうたから と、うたあそびを6パートに分けて分かり易く紹介している。また、巻頭にはあそびを次々と広げて「あそびの連鎖」が生まれることを期待する主旨の文も載せられている。

実際に学生たちとこの教材本を使用してみると、本の特長としてあげられていた内容はほぼ保育教材例として適していると思われたが、中には常識的にも間違っただま掲載されている部分もあった。

それは特に、音楽的な観点から見て問題のあるものが多かった。例えば、うたの途中でう

たうのを中断させてあまり意味のない問いかけを入れたために、本来の音楽のフレーズ感を損ない楽しさが半減してしまうもの、記譜上の音符の間違いがあるため原曲とは異なったメロディーになっているもの、酷いものでは本来 D dur であるべき楽譜の調子記号に＃がついておらず D moll になったまま載せられているもの、B dur で書かれるべき調子記号がb一つしか書かれていないために F dur で記譜されているもの、子どもの歌唱範囲を大幅に超えた二点 F の音域が多用された上に最高音が二点 G までであるもの、本来 A dur で記譜された方が自然と思われる曲が E s dur で記譜されているもの等、明らかに音楽上の問題があった。

このような間違いは市販の保育教材の中にはたまに見られることであるが、これ程の問題点のあるものはそう多くはないと思われる。市販本はそれを購入する人の必要度に応じて選ばれるが、あそびの種類の多さやあそび方が面白ければそれで良いということではないだろう。

しかし、このような間違い、特に音楽上の問題点の多い本の執筆者には、どちらかという幼児教育の長い現場経験がある人とか、音楽を専門にしてきたわけではないが現場の幼児教育者への講習会等において自分が創り出したあそびを伝達する若いカリスマ的存在感のある人が関わっていることがまま見られる。あそびの楽しさが優先され、音楽的なことは二の次という訳である。もちろん、そういった人たちの関わった本でも、専門家以上に音楽的に優れていると認められるものもあるが、保育教材として市販される場合には、不特定多数の読者がそれを購入し、しかもそれが直接幼児教育の現場に影響を及ぼすという事実を直視するべきであろう。執筆者や出版社はそういったことを充分理解し、多角的視点から整合性の確認をした上で出版に当たることが必要ではないだろうか。現場から迎合され疑問等が出されないからといって、それらが必ずしも間違っていないとはいえないのである。

また、H 幼稚園の先生方が考え出したうた（手）あそびを市販本として出版し、音楽を専門にしている短期大学の先生が監修しているにも拘らず、それにも多くの音楽的間違いや著作権侵害に当たるのではないかとこの部分が見られ、何をかいわんやという感がしてしまう。

このように、市販本として世に出すものについては、多くの人の目に触れ批評され、子どもたちの教育に直接影響を与えているという自覚を常に念頭に置く必要がある。執筆者や出版社には、売れる本を出版するという考えではなく、本の出版に関しては真摯に責任を持って当てることが求められているのではないだろうか。

3. 子どもたちと関わる側の問題点

さて、2. で述べたような問題のある市販保育教材本を学生たちが使用する場合に、その内容の良否の選択眼を持つ必要があるだろう。

ここでは、①としてⅡの2で述べた学生たちの考えた「うた（手）あそびは何故必要か」の答えから上位三つをあげて、それらに対する学生たちの捉えかたと保育教材の良否の選択眼をつけるための方法を探り、②として現場の幼児教育者の問題点について述べてみたい。

① 学生側の問題点から

学生たちが幼児教育の現場で子どもたちとうた（手）あそびを楽しむ場合には、第一に「子どもたちの集中力を高め次の活動への区切りとするため」があげられていた。集中力を高めるための素材にはそれなりの面白さと楽しさと心地好さが求められるが、この点に関しては、学生たちは実習等を通して子どもたちが集中してくるうた（手）あそびを経験的に理解している。したがって、そういった種類のうた（手）あそびを身につける必要性に迫られており、あらゆる機会を捉えて多くのうた（手）あそびをさらに獲得しようと必死に努力している。そして、多くのうた（手）あそびを収集し子どもたちの前での実践を続ければ、結果的にあそびの良否の区別ができるように必然的に成長していくものと考えられる。養成校側には、今後とも学生たちがうた（手）あそびの獲得を続けることを支援し、保育教材の選択眼を育てる環境について配慮する必要性が求められている。

第二に、学生たちは「子どもたちの総合的な成長発達を促す」をあげ、指先や身体の成長発達、物の名前を覚え理解力を増進、ことばや感覚の育成、表現力や想像力の伸長、音程やリズム感の育成、感情や情緒面の育成、日常のルールを知らせる等の効果に言及した。学生たちは、うた（手）あそびには子どもたちの総合的な育ちの可能性が秘められていることを実習を通して理解したが、この様な経験を積み重ねることによって、様々なうた（手）あそびの良否の選択眼が養われていくものと思われる。しかしその根底には、学生自身の総合的な成長発達が何よりも必要なことであり、そのための基礎力養成が大切であることを述べなければならない。

次いで「音楽・リズム・ことば・動きによる楽しさと心の開放」があげられたが、学生たちはうたう楽しさ、リズムの心地好さ、楽しいことばの繰り返しや面白い動き、心踊るメロディーに浸る満足感等によって、子どもたちに魅力的な活動が展開されていたうた（手）あそびの様子を、実習を通して感じたからこそあげたものであろう。うた（手）あそびでは、音楽、リズム、ことば、動きは切り離して考えられない程密接な関係性を持っている。ここでも、リズム、ことば、動きに関しては、実習等で子どもたちの喜ぶ良質なものを経験的に知っている。この様な実態を知る度に、子どもたちに心地好い教材とはどんなものかについて、自ずとその選択眼が育つものと考えられる。

しかし音楽に関しては、北村の調査（註3）では問題点があげられた。これは学生自身についてもそうであったが、現場の幼児教育者についても指摘することができた。即ち、うた（手）あそびに関わる現場の幼児教育者の、音楽的意識の有無についてである。次にそれについて具体的に述べてみたい。

② 現場の幼児教育者の問題点から

これは、Ⅱの2. で前述した学生への意識調査から分かったことである。質問は①自分で考えるうた（手）あそびとはどういうものか、②うた（手）あそびはどうして必要か、③実習先でうた（手）あそびをする時に音程やリズムに気がつけたことがあるかの3項目であるが、ここでは①②は省略し、③に対する結果について考察を加えた。

この質問は、第一に筆者の授業で行ったうた（手）あそび指導に対しての振り返りの面から、

第二に様々な実習園で行われているうた（手）あそびの実態を知るための二面から実施したものであり、学生自身の問題として及び実習園の様子から感じられたことの両面から記述してもらったものである。

まず、自分が実習先でうた（手）あそびをした時の様子についての結果は、大きく分けて「音程やリズムに気をつけた」が66%、「気をつけずにやった」が34%であった。「気をつけた」66%の中には、音程やリズム、強弱やテンポに充分気をつけたというものが多かったが、音程には気をつけたがリズムには気をつけなかったものや、その逆のものもあった。また、現場の子どもに合わせたリズムでやる様に気をつけたというもの、自分が練習していたものでも音程やリズムが園のそれとは異なっていたため、先生や子どもたちに合わせる方を優先して気をつけたというもの、リズムや音程、テンポに少し気をつけていたが段々と外れていく様な気がしたというもの、その他などを含めての記述であり、自分ではそれなりに音楽的要素に何らかの注意を向けて実施していたことが分かる。

これらの学生たちが受けた「音楽表現指導法」の授業では、作者のいるオリジナル曲は作者への礼儀として楽譜を配布しての指導を原則としていた。もっとも、伝承あそびなどは音程というよりはリズムを重視し、何れもうたいながら手指や顔や身体の動きを伴って楽しくあそび、その時の子どもたちの年齢やその場の様態に合わせ楽しさ優先で変容してもよいし、また、変容の必然すら持っていることを伝えてはいる。しかし、作者のいるオリジナルな歌詞や曲や動きには、その作者が子どもたちへ伝達したい思いがあることも伝え、教える立場に立つものは作者と子どもたちを仲介する役目を負う必要があることについて考えてもらっている。したがって、実習先でもなるべく「音程やリズムに気をつける」ことに注意を払った結果が、66%という数字として出たものと思われる。

一方「気をつけなかった」34%の学生たちの多くは、うた（手）あそび自体を覚えるのに必死で、とても音程に気を使う状態ではなかったとか、それには全く考えが及ばず無意識だった等と記述した。

これらの学生たちへの調査は、1年生の12月の保育実習終了後に行ったが、この結果から見ると、授業でのうた（手）あそびを指導する際には、特に音楽的な面に注意を向け、学生たちの音楽に対する意識を向上させることや音楽基礎力の養成に力を入れることが、教材使用の際の良否の選択眼を育てることに繋がるため、その指導方法に大いに留意する必要があることが分かった。

第二に、実習園で行われていたうた（手）あそびについて、学生が感じた点について述べてみたい。これは、主に実習園の先生が子どもたちと行っていたうた（手）あそびの様子を学生が見たり一緒にやったりした経験から、あくまでも学生本人が感じ取ったままと記述してもらったものであることを申し添えておきたい。

さて、先生たちが「音程やリズムに気をつけてやっていた」は54%、「音程やリズムは気にせず楽しむことを優先していた」が35%、「うた（手）あそびはやっていなかった」が6%、「分からない」が5%であった。「気をつけていた」54%の中には、子どもたちの取りやすい音程・

リズム・テンポで楽しませながら堂々とやっていたというものが多かった。また、高い音・低い音の使い分けや、声や動きの大小のメリハリをつけていたというもの、先生たちは完璧だったというものもあり、中には子どもの見ていないところで楽器を使用して音程やリズムを確認してから教えていたとか、同僚の先生同士で確認しあっていた等の記述もあった。一方「気にせず楽しむことを優先」した35%の先生たちの中には、音程やリズムを全く気にせず、兎に角大きい声で楽しんでいたというものや、気を使っている様子は全然見られなかったというものの、また、少数であったが、正しい曲を間違えて教えていたというものや、正しい音程でうたう必要はないからと指導されたという記述もあった。

この調査結果の「音程やリズムに気をつけてやっていた」54%や、「気をつけずに楽しむことを優先していた」35%という数字を、高いと見るか低いと見るかは微妙である。幼児教育の現場で行われるうた（手）あそびは、その場を構成する子どもたちの様態によって変容することは当然と考えられているが、それは、何にも増して先生と子どもたちとのコミュニケーションが重視されるからであろう。その場で簡単にできるうた（手）あそびは、両者の人間関係や信頼関係を構築するための導入口となっており軽視できないが、そこに楽しさがなければ成り立たず、だからこそ楽しさが第一優先されることは納得できる。しかし、コミュニケーションツールとしての意味しかないかといえそうではなく、うた（手）あそびには前述の様々な能力伸展に必要な要素が詰まっている。音楽的な側面からも同様であり、先の54%という数字がさらに向上することによって、子どもたちのさらなる音楽的資質向上に資するものと考えられないだろうか。しかし、実習先で「正しい曲を間違えて教えていた」とか「正しい音程でうたう必要はないから」と指導された学生は、大いに戸惑ったという。また、学生の記述の中に「音楽の好きな先生はそれをすごく気にかけているし、音楽やピアノが苦手な先生はあまりうた（手）あそびをしていなかった」とあった様に、それは現場の幼児教育者の音楽に対する意識の持ち様によって決まってくるものと推測されよう。

以上述べてきた様に、現場でも様々な考え方や資質を持つ幼児教育者がおり、何らかの保育教材が使用されていると思われるが、何れにしてもその良否を見極めることのできる力が要求されている。音楽力に関してだけに限定しても、もし苦手な分野であるならば同僚との勉強会や他の講習会等を通して力をつけることが求められるのではないだろうか。

もっとも、この点に関しては、幼児教育者養成校側の問題としても無視できないことであり、いかにしてレベルの高い学生を現場に送り出すかについて、日頃からその責務を痛感しており頭の痛い問題でもある。

誰にでも得意不得意がある様に、全ての能力に長けているものはそう多くはないと思われるが、関係者には子どもたちの能力伸展のために自分の不足部分を補う努力をすることが求められている。

Ⅳ. 授業での実践「どんぐりころころ」

さてここで、Ⅱ及びⅢで述べてきたことを基にして、学生たちの保育教材選択眼を育てるた

めの試みについて述べてみたい。

幼児教育学科に入学直後の学生たちの「音楽表現指導法」の授業における反応は、大きな声でうたうことや自由に動いて表現することができない状態である。クラスの友人とのコミュニケーションがまだ取れない時期でもあるということや、昔うたっていた子どものうたを忘れていたり、自由に動くという経験も少なく、自分をどう表現していいのか分からずに苦しんでいる姿が見られる。しかし、養成校側には2年という短い期間でそれなりの幼児教育者を育成する必要がある、この初期の学生たちが感じている自分を外に表現する恥ずかしさを、何らかの方法でなるべく早期に払拭することが必要であった。

そこで今回、平成19年度入学の幼児教育学科1年生を対象として、誰もが知っている「どんぐりころころ」の童謡を取りあげ、そこから仲間とのコミュニケーションを取ることやうたい方の指導、さらに、その素材から発展させて自分を自由に表現する方法としての試みを実践した。その結果、この授業では与えられたことをこなすというのではなく、何でも自由に自分を表現しても良いのだということに気がつき、入学直後の学生たちの躊躇いが徐々に払拭された様に感じられた。

その後の学生たちは、多少難しい課題を与えても楽しみながら事に当たる姿に変わってきた。このような活動の積み重ねは、保育教材に対する良否の選択眼を徐々に育成するための初期の方法として有効に機能するものと考えられるのではないだろうか。

次にその実践について具体的に述べてみたい。

1. 実施内容

- ① 実施時期と対象者……4月から開始された「音楽表現指導法」の二コマ目で実施（この授業は1年生の前期に、90分一コマで15回設定されており必修である）。幼児教育学科1年生162人対象。1クラス40人で4人1組のグループ活動とする。
- ② 内容……童謡「どんぐりころころ」の読譜と歌唱、歌詞の情景を絵に描くこと、メロディーはそのままで歌詞を替えること、替えた歌詞に全く自由に好きなメロディーを新しくつけること、それを楽譜にすること、グループ毎に発表することである。

2. 読譜力と歌唱力の育成

学生たちは「どんぐりころころ」のメロディーは全員が知っていたが、“どんぐりころころ どんぶりこ〜”の部分を“どんぐりころころ どんぐりこ〜”と、歌詞を間違えて覚えていた者が多く、それに気がついて吃驚し、改めてこのうたに興味を持った。歌詞の確認後、このうたの情景を思い浮かべて絵に描き、それを見ながら思いを込めてうたうことで歌唱力が数段アップした。絵に描いた情景はとても個性的で素晴らしく、漫画チックなものから本格的と思われるタッチの絵も見られた。

次いで、階名でうたい音程を確認することで読譜力の必要性を理解した。また、楽譜を見て直接歌詞でうたうよりも、先に階名読みをするとうたい易くなることも感じ取った。さらに、

歌詞の内容や4分の2拍子でうたうテンポ等に注意を向けることで曲想も豊かになり、情景を思い浮かべてうたう様子にも真剣さが増した。この様に、この活動により読譜力と歌唱力の大切さを意識できる様になった。

3. 創造力の育成

「どんぐりころころ」のメロディーを使用し歌詞を自由に創り替える活動は、メロディーという枠の中でどんな内容の歌詞にしても許されるという自由さを感じ取ってもらうことが狙いであったが、彼女らは思いのほか早くその活動に馴染み、「何でもいいんだね？」と何度も確認しながら、大喜びでその活動にグループ全員が夢中になった。できあがった作品を発表してもらったが、常識の範囲を逸脱しないグループもあれば、漫画素材にギャグを入れて表現したグループ、幼児期の子どもが興味を示すウンチ、シッコを題材にして笑い転げているグループもあり、それぞれのグループの個性が出て、教室に積極的な雰囲気が満ちた。この活動で自由に自分を表現する心地好さを感じた学生たちは、友人や指導者である筆者にも一気に心を拓き始めた。心が拓かれると恥ずかしさも取れ、次からの活動にも影響し授業に活気が生まれた。そして、授業終了後も歌詞を替える活動を続けたと、楽しくてたまらないという感じでそれを後で見せて報告してくれた学生もあった。

この様に、この活動によって心が拓かれさえすれば、短時間で創造力アップの片鱗を見せてくれることが分かった。

次に、その例を五つ紹介しよう。

- ① みんなであそぼう楽しいよ ブランコお砂場鬼ごっこ
楽しくあそんだその後は おててを洗っておやつだよ～
- ② 春にはみんなでピクニック 夏にはプールでおおはしゃぎ
秋にはやきいも大会だ 冬にはみんなで雪あそび
- ③ うんちがコロコロ出てきたよ 野菜が足りないさあ大変
うさぎのうんちじゃダメだから ごぼうを沢山 食べましょう
- ④ 今年もお花見行きました さくらもきれいだったけど
たこやき やきそばおいしくて やっぱり花より団子でしょ
- ⑤ やたらと目線が気になって いそいでそっちを見てみたら
まさかまさかのそのまさか ズボンのチャックがあいていた

4. 記譜力の育成

歌詞の替えうた活動の後、発表された全グループの替えた歌詞の中から好きなものを選び、「どんぐりころころ」ではない新たなメロディーをつける課題に挑戦したが、ここではかなり苦戦している様子が見られた。歌詞を何回も口ずさんではメロディーをうたってみるのだが、メロディーはそれなりにできてもそれを記譜することが中々できない。もっとも、幼児教育学科に入学してくる学生たちは、それまでに学校教育以外に音楽家になるための専門の勉強をし

てきた訳でもなく、メロディーを記譜することなど即座に行うという経験があまりない者が多いので、やむを得ないことでもある。学生たちの記譜した楽譜の通りにピアノで弾くと、そんな曲を作ったのではないという。要するに学生たちのうたうメロディーと記譜された楽譜が全く異なるという現象である。これは幼児教育学科の学生だけの問題ではなく、筆者が非常勤校で教えている看護専門学校の学生たちも保健師学科や歯科衛生士学科の学生たちも同様の現象を示している。それは詰まるところ、それまで義務教育や高等教育で受けてきた音楽教育の問題でもあるといえよう。音楽教育が今まで何を教えてきたのかについては、拙著「音楽教育における“不易”と“流行”」(註4)、拙稿「音楽教育に求められるもの」(註5)に述べたのでここでは省略するが、学校教育を離れた時に音楽基礎力を求められても、その力がそれまでの音楽教育では身につけていないという結果が、この活動からも証明されている。

今後、養成校側でも2年という短期間の中で幼児教育者が現場に出て必要とされる記譜力や作曲能力等を育成する必要があるが、筆者担当の「音楽表現指導法」はもちろんのこと、ピアノや声楽、その他音楽関係の授業の全てにおいてあらゆる機会を捉えて教育しなければならない問題である。

次にその例を三つ紹介しよう。下記の楽譜は学生たちの実際うたうメロディーとは一致していない。学生たちは、自分のうたうメロディーを五線に書くことは承知している。しかし、うただけうたとそれなりに上手であり、自分たちの書いた可笑しい楽譜を見て全員が同じメロディーでうたえるという不思議な現象が起こる。音符を記譜できないというより、一つひとつの音符の形や長さの理解ができておらず、調子記号、拍子記号、一小節の拍数が分からないので、したがって縦線も書けないという吃驚する様態を示している者がいる一方、音楽基礎力がありきちんと書ける学生たちもいて、その差が何からきているのかについては、今後詳細な調査が必要であろう。

なお、この課題は作られた曲の良否は問わず、兎に角、作曲したものを五線紙に書くという点だけに注目したものであることを付け加えておきたい。

① よく書けていると思われる例 (題名…うんちちゃん)

図 I



♪問題点…ほぼ書けているが、五線紙のト音記号の前に線を2箇所引いたこと、3小節目の二拍目の四分音符のハタが逆であること、最後は中間終止形で終わっていること(終わった感じに作曲する旨伝えていたが、意図的でなく恐らく無意識に作ったものと考えられる。意図的であればこれを問題なしとする場合もある)、終止線の太さが逆であること等である。学生たち

のおよそ半分位がこのパターンに該当すると思われる。

② 音程だけ書くことができた例（題名…春夏秋冬）

図Ⅱ



♪問題点…拍子記号がなく一章節に入る音符数が分からない、縦線を区切ることができない、音符の書き方と長さが分からない、ト音記号が書けない、終止線が一通りずつ書かれている等である。しかし、メロディーラインとつけられた歌詞を見れば、凡そどんなうたかが理解できる。これはよく見られるパターンである。根気よく指導すれば早い時期に改善する可能性がある。

③ 何を書こうとしたのかよく分からない例（題名…いちねん）

図Ⅲ



♪問題点…作曲は過去にした経験がなく、記譜に関してもどう書いたらよいか分からず戸惑っていたグループである。作曲したメロディーはと聞くと、全員が揃ってそれをうたってくれた。それなりにまあまあという曲だったが、五線紙に書く段になると上記の通りになってしまった。数はあまり多くはないが指導にかなりてこずるパターンである。

さてこの後、各グループ毎の曲を聞き、楽譜とのギャップについて夫々説明し指導をしたが、学生は自分たちのうたうメロディーには自信を持っていて、それなりに曲になっているものの、記譜された楽譜を音にして確認すると、信じられないという顔で自分たちの作った曲ではないと否定した。そこではじめて、自分たちの表現したいものと記譜能力のギャップに吃驚し、音楽的基礎力がいかに大切かに気づいたという訳である。本学の幼児教育学科に入学してくる学

生たちは幼児教育者になりたいという強い気持ちを持っており、憧れの幼児教育者になるために、今後展開される2年間の音楽関係の授業を頑張らなければという思いになったという。

5. コミュニケーション能力の育成

これは、たまたま座席の近い1グループ4人の活動としたが、替え歌の歌詞を考える頃から当初のぎこちなさが一気に取れ、全員に驚くほどの笑顔が浮かぶ活動になった。名前もよく知らないもの同士であっても、幼児教育を学ぶという同じ志を持つものとしての親近感があり、その後の話し合いには名前や趣味等の情報交換も含めて、かなり活発な意見が出されていた。この様に、一つの課題に取り組むことで友人とのコミュニケーションが取れることも、幼児教育学科に学ぶ学生にとっては重要な能力であり、今回の活動はコミュニケーション能力の育成に関して成果があったものと考えられる。

V. おわりに

さて、今まで保育現場における児童文化財について、特に市販教材に見られるうた（手）あそびについての問題点と、幼児教育学科の学生たちのそれに対する良否を見分ける選択眼を養成することについて論じてきたが、分析結果だけを見ても一夕一朝では解決できない課題が山積していた。例えば、まず学生たちが義務教育や高等教育で受けてきた音楽教育の問題が根底に存在していた。そして、さらに困難な問題は、学生が幼児教育学科に在籍する2年という短期間で現場に通用する力を養成し、幼児教育の現場に即戦力として送り出すという至難の業が、養成校側に求められているということである。全くもって無理としかいいようがないが、少しでも彼女らに力をつけるための日々の努力は欠かせないという現実がある。しかし、学生たちが心を拓きやる気になった時には一気に成長するケースも多く、地道な指導の必要性があるものと考えられる。

今回は、学生たちが幼児教育者となるための自分の音楽的な能力不足に気がつき、少しでも能力をアップさせたいという気持ちになり努力する姿勢を養成するための試みとして、ある程度の効果が見られたものといえよう。そして、子どもたちと関わる際の保育技術としてのうた（手）あそびの重要性に目覚め、その習得に心がける態度が育成され、さらに、うた（手）あそびの効用や定義にも眼を向けるなど、学習内容を深めたいという真剣さが認められるようになった。そして、そういった観点から学習していくうちに、市販の保育教材の良否の選択眼が必要なことに気づくと共に、一般常識はもとより音楽的能力も求められていることを理解した。

今論文では前述した様に、幼児教育の現場ではいかに音楽的要素が必要なのかを、入学後早期に学生たちに把握してもらうために、「どんぐりころころ」を題材にした授業を実施したが、これは読譜力、歌唱力、創造力、記譜力、コミュニケーション能力の育成に効果が認められた。すぐにという訳にはいかないが、少なくとも求められている能力と自分の能力のギャップに気がつくことで、後の勉学態度に影響し、真剣さが出てきたことは評価できる。

また、市販されている保育教材に対する問題点についても論じたが、現場の幼児教育者の問

題や、保育教材本の執筆者や出版社の考え方を問うことは、我が国の現状では至難の業といわざるを得ない。そうであるならば、学生のうちにその教材の良否の選択眼を育成することこそが必要であるが、それはかなり困難な課題である。しかし、幼児教育者養成校側には、何とかしてその課題に立ち向かうための様々な工夫をする必要に迫られているといえよう。

【註および参考文献】

註 1) 参考文献表題を参照

註 2) 2005 年 12 月に、筆者担当の「音楽表現指導法」の授業で実施したもので、幼児教育学科 1 年生が保育実習 I で体験したうた（手）あそびについて調査したものである。

註 3) 註 2 と同じ

註 4) 2002 北村恵子・西澤昭男他共著 音楽教育における「不易」と「流行」 教育芸術社 参照

註 5) 2002 北村恵子 音楽教育に求められるもの 上田女子短期大学紀要第 25 号

1. 1986 斎藤二三子 おもしろ手遊び指遊び すずき出版
2. 1988 上笙一郎 児童文化書々遊々 出版ニュース社
3. 1990 芸術研究所 顔・指・手・足・体あそび 黎明書房
4. 1991 安藤美紀夫・森上史郎共著 保育と児童文化 学術図書出版社
5. 1992 青木 實他 児童文化 学芸図書株式会社
6. 1994 輪嶋直幸・阿部敏行共著 満点指あそび チャイルド社
7. 1994 北村恵子 音楽表現の世界 樹芸書房
8. 1998 遠藤 晶 幼児の手あそびにおける音楽的発達について 保育学研究第 6 巻 1 号 日本保育学会
9. 1999 勅使千鶴 子どもの発達とあそびの指導 ひとなる書房
10. 2000 鈴木みゆき 歌あそびブック ひかりのくに株式会社
11. 2003 湯浅とんぼ・島本一男共著 歌で遊んじゃおう 小学館
12. 2004 伊藤嘉子 手あそび歌あそび 60 音楽之友社
13. 2005 NPO 法人東京都公立保育園研究会 子どもに人気のふれあいあそび ひとなる書房
14. 2006 菅野満喜子監修 幼稚園・保育園のうたあそび 成美堂出版
15. 2006 北村恵子 保育現場における児童文化財について そのⅠ 「所報」第 28 号 上田女子短期大学児童文化研究所
16. 2006 北村恵子 保育現場で行われている手あそびに関する一考察 上田女子短期大学幼児教育学科 保育者養成年報